

『香取新報』にみる大正一〇年外遊時の皇太子裕仁親王

堀 口 修

はじめに

大正一〇（一九二一）年三月三日、皇太子裕仁親王（後の昭和天皇）は、外遊（訪欧）のため御召艦香取に乗艦し横浜を出帆した。この皇太子の訪欧は、日本史上はじめてのことであったため、その決定は紆余曲折を経てなされたのである。中でも大正天皇の健康問題などから貞明皇后の危惧の念は強く、そのため内閣総理大臣原敬をはじめとする政府要人は、皇后の説得に動いた。その結果、皇后の理解が得られ、ここに皇太子の訪欧が決定されたのである。

従来の研究では、主に外遊決定の背景と経緯、そのねらいと成果、訪問状況などに注目したものが多い⁽¹⁾。それに対し本稿では、御召艦香取で発行された『香取新報』⁽²⁾からみた皇太子の姿に迫ってみたい⁽³⁾。その意図は、日本国内ではとても考えられないほど皇太子と乗組員達が近接している

こと、そうした時空間において、皇太子がどのように映り、受け止められ、理解されたのか、はたまた皇太子と乗組員との交流の姿を読み取ろうとすることである。

通常時の分厚い護衛の壁に隔てられることなく約半年間、これほど間近に皇太子に接した国民、乗組員達は、この時以外いなかった。稀にみる機会に恵まれた乗組員達には、皇太子がどのように映っていたのであろうか、また、この状況をどのように認識していたのであろうか。そうした意味から『香取新報』で語られ、且つえがかれた皇太子の姿を確認することは、大正デモクラシー下の皇太子と国民との精神的肉体的距離間を考える一素材となるのではないかと考える。

そこで、本稿ではまず最初に外遊問題の経緯と旅程を押しさえ、ついで『香取新報』に外遊中の皇太子の姿がどのように語られ、えがかれていたかを明らかにし、本稿の課題

を果たしたい。

一 外遊問題の経緯と旅程

大きな政治問題となった皇太子の外遊問題であるが、その決定に至る経緯については、以前発表した論稿で検討したことがあるので詳細はそれに譲る。⁽⁴⁾ここでは基本的なことを確認してみたい。

裕仁親王は、明治三四（一九〇二）年四月二十九日、明治天皇の皇孫として誕生し、その約二ヶ月後の七月、里親の海軍中将伯爵川村純義の許に預けられる。このことは、川村の亡くなる同三七年八月までの三年間に及んだ。そして川村逝去後の明治三八年四月、親王は赤坂の皇孫仮御殿に移った。

明治四一年四月、裕仁親王は学習院初等科に入学する。この時の院長が乃木希典であった。乃木の教育方針は、質実剛健を軸に据えたものであったと言われている。そして裕仁親王は、大正三年二月、学習院での教育を終える。その後、高輪の東宮御所内に御学問所が設けられ、同年五月から堤経長ら五人の御学友と共に、旧制中学レベルの教育をうけた。東宮御学問所の総裁は、元帥東郷平八郎であった。御学問所の教育は、人文・社会・自然科学にわたるバランスのとれたもので、各分野ともに一流の教授陣が担当

した。教授陣の中で特に異彩を放っていたのは日本中学校長の杉浦重剛で、彼は、帝王学としての倫理学を進講し、君主のあり方を熱心に説いたことは頼に有名である。⁽⁵⁾御学問所の教育は、約七年間にわたり行われたのであるが、やがて御学問所の教育が箱入り教育との批難が起きてくる。特に臣下とコミュニケーションがとれない皇太子、その皇太子をサポートできない側近といった点が批難された。

大正五年一月二十九日、霞ヶ関離宮で皇太子臨場の午餐会が催された。この午餐会は、同月三日の立太子礼をうけたものであったが、その時あることが起きた。実はこの午餐会に第四代学習院長（明治二年一月～明治二五年三月）を務め、皇族教育に尽力したキャリアを持つ宮中顧問官三浦梧楼が招待されていた。その彼が皇太子の举措、及びその情景について痛く憤慨し、休憩室において山県有朋、松方正義、土方久元に難詰したと言う。⁽⁶⁾この皇太子教育をめぐる三浦の批難は、杉浦にも伝わった。それは大正六年一月二日、彼が三浦を訪い「立太子式後ノ御饗宴ニ関スル注意談ヲ聞キ、大ニ参考」としたとのことからも明らかである。皇太子の教育方法についての三浦の発言は、その教育現場にも伝わった。だがその後、杉浦達が具体的にどのように対応方を検討実施したのかは明らかではない。いずれにしてもこの時、皇太子教育のあり方についてかなり深刻

な議論があつたことは事実であり、また、その後も将来の天皇の資質を問う論議は絶えることはなかった。

そのことは右の話から数年後の大正八年、天皇の健康問題がただならぬ様相を示しはじめたため、より大きな問題、即ち皇太子教育と外遊がリンクされて論議されたことにより顕在化した。そのことは、つぎの内閣総理大臣原敬と枢密院議長山県有朋との会見時の話からも明らかである。なお、(一)内は引用者によるもの。以下同じ。

尚ホ此間ノ観艦式ニモ（大正天皇）御朗読相成難キニ因リ、皇太子殿下代ツテ御朗読アラハ例規如何ハ知ラサルモ、軍人ハ如何ニモ難有事ニ感泣スヘシト云ヘタルモ行ハレズ。軍令部長朗読シタリナト云フニ付、余（原）先般来此事ニ付テハ真ニ憂慮シ居ル次第ヲ物語リ、夫レニ付テモ皇太子殿下ニ今少シク政事及ヒ人ニ接セラル、事等ニ御慣遊ハサル、必要アリト思ヘ、過日松方ニ内話シ、松方同感ニ付、浜尾東宮大夫ニ内談シタルモ要領ヲ得ス。遺憾ノ至リナリト云ヘタルニ、山県同感ニテ浜尾ニ注意シ御成婚前欧米御遊歴ノ必要ナル事、少壮者ノ進言アルニ付、御決行然ルヘシト（浜尾に）云ヘタルモ、御学問ハ未タ終了セラレズナト云ツテ、未タ決行ニ至ラストテ嘆息談ヲナスニ付、余ハ御洋行ノ事尤モ必要ナリト述ヘタル末、三浦梧楼ノ

如キ者ヲ御側近ニ御採用アリテハ如何（中略）ト云ヘタル、山県ハ多少感ニ入りタルニヤ、三浦ノ名ヲ繰返シテ其適當ナル事ヲ返答シタリ、余実ニ本件ヲ国家ノ重大事件ト思ヘ、常ニ憂慮シ成可奏上事モ余自身ニ之ヲナシ居ル位ノ事ナリ、山県、松方、西園寺皆ナ此点ニ付テハ真ニ憂慮シ居レリ（原敬日記）大正八年二月六日条。

こうして皇太子の教育問題を「国家の重大事件」と認識する原と山県との間で、皇太子の外遊を実現することが確認された。特に山県は、その後も教育及び外遊問題に積極的姿勢を見せる。大正九年八月一日、山県は約一ヶ月前に東宮武官長に就いた奈良武次が来邸した際、奈良につきのような外遊問題も含めた皇子教育に関する基本方針を示した。

- 一、人に接する機会を多くし、談話に慣れしむること。
- 一、御学門（問）の方針は、問口広くして奥行浅き方針を採ること。
- 一、乗馬演習を励行すること。
- 一、近衛兵を呼び軍隊指揮を実習すること。
- 一、語学練習のこと。
- 一、御外遊のこと、伯爵位のことにし、手軽に少数の供奉員にて実行するを可とすること。⁽¹⁰⁾

さて右の山県の基本方針にあるように、皇太子の外遊については具体的な行動が示されなければならない段階に入つた。ところが外遊については宮中、内閣、民間において激しい議論が展開することになる。そこでつぎに外遊に關する論議について触れてみたい。

大正九年の夏のはじめ、松方内府（外遊の發案者とも言われている）の意をうけた宮内大臣中村雄次郎は、皇后に対し外遊の必要性をつぎのように言上する。

世界今日ノ大勢ニ鑑ミ、將來万機ヲ親裁アラセラルヘキ皇太子殿下カ、一タヒ御見學ノ為メニ外遊アラセラル、ヲ必要トス。而シテ其時機ハ実ニ今日ニアリ。若シ之ヲ他日ニ遷延セハ、更ニ御結婚問題ノコトアリテ、或ハ其機ヲ失ハンコトヲ恐ルト。乃チ元老ノ協議定マル。然レトモ天皇陛下ハ御脳症アラセラル、ヲ以テ、先ツ之ヲ 皇后陛下ニ奏上シテ、其ノ御許諾ヲ受ケ、然ル後ニ 聖上ノ御裁可仰ク⁽¹⁾

これに対し皇后は外遊には皇太子が若すぎるとして賛成の意を示さない。そのため以後、皇后を如何に説得するかが焦点となつた。そして関係者達による皇后説得の努力が功を奏し、ついに皇太子の外遊が決定したのであるが、既述したようにその目的については関係者の間でも種々論じられていた。ここでは大正一〇年一月一日、松方内府と中

村宮相が天皇に上奏した際のもの⁽¹²⁾とされるものがあるので、左にあげてみたい。

一 皇太子殿下天資御聰明ニ被為涉、多年御勤學ノ結果、御學業ノ上ニ於テハ最早御不足モ被為在間敷候得者、此上ハ御見聞ヲ拡マラセラレ、且ツハ社会ノ実情ニ御通曉被遊候為、欧米各国ノ形勢御視察被為在候事、最モ肝要ニ可有之奉存候間、御洋行ノ儀被仰出度奉願候。

一 世界大戰ノ欧州ニ及ホセル影響ノ甚大ナルハ申込モ無之。却後民族ノ離合邦國ノ抗争尚ホ未タ息マス。其間民衆ノ運動思想ノ動搖迭ニ起リ、各国國勢ノ消長目前ニ呈露シ来リ候ニ付、治乱興廢ノ因ル所ヲ明カニシ得ルコト、現時ノ如キ恐ラクハ空前ニシテ、又絶後ニ可有之。是等実況ノ御視察ハ誠ニ再ヒ得難カルヘキノ好機會ト可申歟。

一 殿下ハ近來益御健勝ニ被為涉候ニ付、長途ノ御旅行モ何等ノ御支障有之間敷拜察致候得共、尚ホ堪能ノ医員ヲ奉仕セシメ度奉存候。

一 殿下ハ東宮トシテ御勤モ被為在、又御孝養ノ上ヨリ申候モ、長期ノ御不在ハ如何哉ニ被存候間、大約六七月ノ御期間ニテ御巡遊アラセラレ、軍艦御搭乗、御往路ハ印度洋御渡航、欧州ノ重ナル邦國

歴訪被遊、御帰路ハ北米合衆国ヲ御通過（但し米
国訪問は実現せず）相成候事便宜ニ可有之奉存候。

一 今次ノ御洋行ハ御見学ノ御旨趣ニ御座候間、一二
帝室御訪問ノ場合ヲ除クノ外ハ、終始御微行ノ事
トシ、総テ簡易ヲ主トシ随員ノ如キモ余マリ其数
ヲ多カラサルシムル様致度候。最モ泰西ノ事情ニ
精通セル一二練達ノ者ヲ扈從セシメラル、ハ、勿
論必要ノ儀ニ可有之。是等ニ関シテハ更ニ御允裁
ヲ可奉仰候。

大正十年一月

ここで強調されていることは、外遊を行うことにより欧
米各国の形勢を視察して見聞を広める、世界大戦の欧州に
与えた影響——各民族の対立抗争・各国国勢の消長・治乱
興亡——の実況を視察する、という点で、皇室の将来を構
想する時、避けて通れない課題に繋がる重要なポイントを
示唆していた。外遊の意図は、まさに未来の皇室を見据え
た決断であつたのである。

二 旅程とその意義

実は、皇太子の外遊が決定する流れの中で、「宮中某重
大事件」で勢いに乗る勢力が皇太子の外遊に反対する動き
が活発化する局面が生じていた。そうした中、大正一〇年

二月一八日、皇太子は東宮御学問所での修学を終了する。
その後の二月二〇日、内大臣松方正義は皇太子に拝謁して
「御洋行に関する注意」を述べると共に、「勇気を鼓して断
行¹³」することを言上する。そして同年三月三日、皇太子は
いろいろな意味において大きな期待が寄せられた外遊の途
に就く。

皇太子は大正一〇年三月三日横浜を出帆し、英国・仏
国・白国・蘭国・伊国の訪問への途に就いた。そこで左に
旅程の概要を記す。¹⁴なお、会見した要人は、その数が多い
ためごく一部の人物に限った。

（3・3）御召艦香取横浜発。（3・6）与那原着。那
覇・県庁、首里・尚侯爵家。夕刻、与那原発。（3・
10）香港着。スタップス総督。（3・12）総督を招き留
別（離別）晚餐会。（3・13）香港発。（3・18）シンガ
ポール着。ギルマード総督。（3・22）シンガポール発。
（3・28）コロンボ着。マンニング総督。（3・31）総督
を招き留別晚餐会。

（4・1）コロンボ発。（4・2）供奉艦鹿島第四罐室で
罐管破裂のため機関兵三名殉職。（4・7）香取の汽罐
第三号罐破裂のため二名殉職。（4・15）スエズ着。
（4・17）ポートサイト着。（4・18）カイロ着。エジプ
ト統監アレンビー元帥。ピラミッド・スフィンクス。

統監主催晩餐会。(4・19) エジプト国王。統監主催第二回晩餐会。(4・21) ポートサイト発。(4・24) マルタ・ヴァレッタ着。総督ブリューマー元帥、英国第四王子ジョージ親王。総督主催晩餐会。(4・25) 総督を招き留別晩餐会。(4・26) ヴアレッタ発。(4・30) ジブラルタル着。スミス・ドリアン総督、ニブラック米国欧州艦隊司令長官。

(5・2) 総督を招き留別晩餐会。(5・3) ジブラルタル発。(5・7) スピットヘッド着。マッデン英国大西洋艦隊司令長官。旗艦タイーン・エリザベスで午餐会。この日、「英国々民ニ対スル御挨拶」を出される。

(5・9) ポーツマス着。エドワード皇太子、ポーツマス市長。ついでロンドン着。英国皇帝ジョージ五世、第二王子ヨーク親王、コンノート親王、カーゾン外相。皇帝・皇后と午餐会。皇帝主催晩餐会。バッキンガム宮殿逗留(5・11)。(5・10) ウインザー宮殿でエドワード皇太子主催の午餐会。外相主催晩餐会。この日の夕刻、皇帝と約一時間にわたり私的に懇談。(5・11) ロンドン市歓迎式。市長主催の午餐会。エドワード皇太子主催晩餐会(セント・ジェームス宮殿)。(5・12) 英国上下両院・ニューオックスフォード劇場。(5・13) 大英博物館・イングランド銀行・ロイド海事

保険・ロンドン塔。皇太子主催晩餐会(日本大使館)、ロイド・ジョージ首相、バルフォア前外相、ジョセフ・チェンバレン蔵相。駐英大使林権助主催夜会。(5・14) オックスフォード大学・デリー劇場。(5・15) ロイド・ジョージ主催午餐会(チェツカース・首相別邸)。(5・16) ケンレー飛行場・グリニッジ天文台。海軍大学校長主催晩餐会。(5・17) オルダーショット兵営・陸軍士官学校・陸軍大学校。駐英大使林権助主催奉迎晩餐会(クラリッジス・ホテル)。(5・18) ロンドン発。ケンブリッジ着。ケンブリッジ大学でセント・ジョンス大学教授タンナー講義「英国王室とその国民との関係」。エマヌエル大学副総長主催午餐会。ケンブリッジ大学名誉法学博士学位。トリニチ大学校長主催晩餐会。同夜、ケンブリッジ発。(5・19) エジンバラ着。セント・チャールズ寺院・スコットランド高等裁判所。エジンバラ市長主催晩餐会。(5・20) エジンバラ大学名誉法学博士学位。エジンバラ市衛戍司令官デーヴィス陸軍少将主催晩餐会。(5・21) エジンバラ発。パース着。アソール公。夕刻、鮭釣り。アソール公居城逗留。(5・22) タンメル湖。(5・23) 鮭釣り。近辺観賞。アソール公主催送別晩餐会・舞踏会。同夜、パース発。(5・24) マンチェスター着。マ

ンチエスター市長主催晩餐会。(5・25) ヴイックカー
会社電気工場。マンチエスター市長主催午餐会。ア
ムストロング会社分工場・クロスレー自動車会社製作
所・マンチエスターピッポドロム(演芸場)。(5・26)
運河会社主催午餐会。マンチエスター発。ロンドン着。
日本協会歓迎晩餐会。日本大使館滞在。(5・27) イ
トン公立学校。正午、国王・王妃主催送別内宴。皇太
后訪問。第三艦隊司令長官小栗孝三郎主催日本海海戦
記念祝賀会。夕刻、在留日本人会園遊会(リージェン
ト・パーク)。(5・28) 英国接伴員招待午餐会(ラネラ
倶楽部)。戦闘競技会。夕刻、日本人会主催茶会。
(5・29) 肖像画家オウガスタス・ジョン皇太子肖像描
写。ゴルフ観戦(アディントン)。同日、ロンドン発。
英国皇帝、同皇太子送別。ポーツマス着。ポーツマス
鎮守府司令長官招き留別晩餐会。(5・30) ポーツマス
発。ル・アーブル着。ル・アーブル市長。(5・31)
ル・アーブル発。パリ着。大統領代理ラッソン侍従武
官長、ブリアン首相、ギストー海相。駐仏大使石井菊
次郎主催晩餐会(大使官邸)。
(6・1) エリゼ宮でミルラン大統領主催午餐会。(6・
2) 無名戦士の墓に献花(凱旋門下)。エッフェル塔。
石井大使主催外交団晩餐会(大使官邸)。(6・3) ルー

ブル旧王宮博物館美術館・廃兵院・ナポレオン一世墳
墓。パリ市長・セーヌ県知事聯合主催歓迎式(パリ市
役所)。海相主催晩餐会(官邸)。オペラ劇場で「タイ
ス」観劇。(6・4) 砲兵学校(フォンテンヌブロー。パ
タン元帥安内)。フォツシユ元帥主催ナポレオン一〇〇
年祭(フォンテーヌブロー城)。(6・5) ラ・マルメー
ゾン城・サンジェルマン城見学。(6・6) 日仏協会主
催歓迎午餐会(シャンチー城)。シャンチー城見学。
石井大使主催のミルラン大統領夫妻招待晩餐会(大使
官邸)。オデオン劇場で大統領と「マクベス」観劇。
(6・7) 留学中の東久邇宮主催午餐会。石井大使主催
晩餐会(ユニオン・アンテル・アリエ)。(6・8) ベルサ
イユ宮殿。オペラ劇場「アイーダ」観劇。(6・9) 市
中散策。(6・10) パリ発。ブリュッセル着。皇帝アル
ベール一世、ブラバン皇太子。王宮・晩餐会。(6・
11) 王室陵墓花環捧呈式(ノートルダム寺院)。皇帝・
皇后と午餐会(ラーケン離宮大温室)。イーゼル戦場・
コンゴ博物館。首相カルトン・ド・ヴァイル主催晩餐
会(首相官邸)。ブリュッセル市長主催歓迎夜会。(6・
12) パレード・ジユスチース、ワテルロー古戦場。
皇帝・皇后主催内宴。独立五十年館。王宮で皇帝・皇
后へ国賓辞退の挨拶。白国皇太子を主賓とする皇太子

主催晩餐会（帝国大使館）。駐白大使安達峯一郎主催夜会。（6・13）西部戦線跡オスタンド・ジツクスミュード（白軍戦死者墳墓大供花）・イーペル。（6・14）アントワープ着。アントワープ市役所。画家リユーベンスの宗教画観賞（ノートルダム・大天主堂）。日白研究会主催歓迎会。王宮で皇帝・皇后・皇太子に御暇乞。安達大使主催晩餐会（オテル・アストリア）。（6・15）アントワープ発。白国皇太子。アムステルダム着。ウィヘルミナ女王名代皇嫡ハインリッヒ。王宮で女王と会見。王宮・晩餐会。（6・16）アッシエル金剛石細工場。正午、王宮で女王・皇嫡ハインリッヒと会食。画家レンブランドの「夜警」観賞（国立美術館）。株式取引所。ハーグ着。ハーグ王宮で女王と会見。皇太后と会見。外相歓迎夜会（外相官邸）。（6・17）森の離宮・平和宮。ロッテルダム着。漕艇倶楽部。ロッテルダム港・ウィルトン大浮船渠。ハーグ着。女王主催送別晩餐会。（6・18）王宮で女王・皇太后・皇嫡ハインリッヒと告別の会見。アムステルダム動物園。駐蘭公使田付七太主催晩餐会（スヘフェニンヘン）。（6・19）皇嫡ハインリッヒを招き御留別晩餐会。（6・20）スヘフェニンヘン発。ベルギーのルーヴァン大学・ロンサン砲台。リエージュ経由でパリ着。（6・21）パンテオン大

殿堂、ノートル・ダム・ド・バリ、サント・シヤペル礼拝堂、上下両院。メトロ乗車。（6・22）セーブル国立陶器製造所。パリ発。（6・23）ストラスブール着。アルザス・ローレン州総督アラブッチート、アルザス駐屯軍司令官アンペール陸軍中将。練兵場。天主公教・大天主堂。ストラスブール大学訪問。ライン下り。同夜、メッツ着。（6・24）陸軍大臣バルツウ。攻防演習。ローレン軍司令官・陸軍中将ベルテロー主催午餐会。普仏戦争古戦場サン・ブリヴァ・グラヴロット・サンタンカン及び第一次世界大戦激戦地戦跡アゴンダージュ、鉄工場。（6・25）第一次世界大戦激戦地ヴェルダン。ペタン元帥。フォーブール・バヴェーの戦死者墓地供花。ヴォー保壘・チョコモン保壘付近仮納骨堂・銃剣塹壕・三〇四高地・モンフォーコン。同夜、パリ着。（6・26）チュイルリ公園慈善市。ロンシャン大競馬場（大統領案内）。（6・27）スペイン皇帝アルフォンソ一三世（訪仏中。スペイン大使館）。皇帝主催午餐会。ゴームン活動写真撮影所。（6・28）サンクトルーの万国度量衡事務局。ソルボンヌ大学。アッペル総長。講堂・図書館。大学生戦死者記念碑供花。パリ大学創立者リシュリユ墳墓。（6・29）パリ発。アルベール着。フランシエー・デスペレー元帥。第一次世

界大戦激戦地ソナム地方、戦禍村落（ラ・ボアゼル・ポチエール・チエップヴァル）、マリクール、グイユモン・英軍戦死者墓供花。パリ着。（6・30）バルツウ陸相主催午餐会（官邸）。ポリテクニク（工芸学校）。

（7・1）サンシール陸軍士官学校、ル・ブルジュ飛行場。（7・2）ゴルフ（ラ・ブリー）。ソルボンヌ大学教授ラルノード講義「仏国政府とその人民との関係について」。「マドムアゼル・ド・ラ・セイグリエル」（コメデー・フランセーズ劇場）。（7・3）パリ発。ランス着。大天主堂・ボンベル保壘・ボンムリ会社（シャンパン製造所）。米国戦没者墓地。同夜、パリ着。（7・4）ソームユール騎兵学校。（7・5）ゴルフ場（ラ・ブリー）。パリ市上下水道工事（プラス・シャトレ）。陸相を招待して皇太子主催晩餐会。（7・6）ミルラン大統領。皇太子主催大使館員等御留別宴。（7・7）パリ発。リヨン・マルセイユ経由でトゥーロン着。（7・8）ドイツ・ツェペリン式飛行船御覧。トゥーロン鎮守府司令長官サゴー・デエヴォロー海軍中将等留別晩餐会（香取艦内）。（7・9）トゥーロン発。（7・11）ナポリ着。伊国皇帝ヴィットリオ・エマヌエル三世名代接伴員長ピスカレッツ海軍中将・海軍大尉スポレート親王・ナポリ鎮守府司令長官デル・ポーノ海軍中将・

知事・市長。カブリ島紺碧窟。スポレート親王・同親王母宮。（7・12）ナポリ発。スポレート親王・ナポリ鎮守府司令長官。ローマ着。伊国皇帝・首相・外相。パンテオン。皇祖父及び皇父御墓・祖国祭壇花輪環捧呈。伊国統一記念閣。デアニコロー丘・ピンチヨ公園・ボルゲーゼ公園。クイリナーレ王宮で皇帝主催晩餐会。クイリナーレ王宮逗留（7・16）。（7・13）皇帝・アオスタ親王の案内で戦闘競技会御覧。王宮で皇帝・アオスタ親王と午餐。美術展覧会（ナチオナーレ街）・美術館（ボルゲーゼ公園）・現代美術館（ヴァレ・ジュリア）。皇帝・アオスタ親王を招き皇太子主催晩餐会（日本大使館）。（7・14）古代国技館・凱旋門・古ローマ公会堂。パラチノ丘で考古学者デヤニコモ・ポニーのローマ興亡説明。カタコンブ（サン・カリスス）・カラカラ皇帝大浴場。王宮で皇帝・アオスタ親王と午餐。食後、皇帝・親王と共にローマ市役所訪問。ローマ市長。カンピドリオ美術館・博物館。皇帝主催晩餐会。（7・15）サン・パオロ・フォーリ・ムーロ並びにサン・デオワンニ・イン・ラテラーノ聖堂。バチカン訪問。ローマ法王ベネディクト一五世及び首相ガスパリ師。サン・ピエトロ聖堂。晩餐後、皇帝の案内で禁苑並びに主馬寮御覧。（7・16）法王庁博物館。駐伊大使

落合謙太郎主催午餐会。落合チエコスロバキア国大統領マサリク（訪伊中。日本大使館）。バチカン法王庁所属モザイク製作所・博物館、サン・ピエトロ聖堂。クイリナーレ宮殿で皇帝・アオスタ親王と晩餐。（7・17）ローマ発。皇帝・アオスタ親王。ナポリ着。鎮守府司令長官・スポレート親王。鎮守府司令長官主催午餐会。アオスタ親王妃・スポレート親王。ナポリ水族館。皇太子主催御留別晩餐会。スポレート親王。鎮守府司令長官主催夜会。アオスタ親王妃・スポレート親王。（官邸）。（7・18）ボンペイ。皇太子主催午餐会。鎮守府司令長官。ナポリ発。（7・22）ポルトサイト着。（7・23）ポルトサイト発。（7・24）スエズ着。（7・25）鹿島後甲板において活動写真「コロンボよりポーツマスに至る殿下の御行動」御覧。（7・26）スエズ発。（7・30）アデン着。（7・31）アデン政務長官スコット陸軍少将。貯水池・旧市街。長官官邸で御茶。（8・1）アデン発。鹿島、アフリカ東北端ガアルダフイ岬で座礁した大阪商船会社・暹羅丸の乗組員救出のため急派。（8・2）鹿島救助を終え合流。（8・3）鹿島乗組員二等水兵一名行方不明。（8・9）コロンボ着。コロンボ総督代理・英国東インド艦隊司令長官。（8・10）コロンボ総督代理・英国東インド艦隊司令長官。

鹿島で小栗司令長官主催午餐会。マンニング総督・英国東インド艦隊司令長官。香取で皇太子主催晩餐会。（8・11）コロンボ発。（8・18）シンガポール着。午後発。（8・21）カムラン湾着。仏領インドシナ総督代理、仏国軍艦オルテイル艦長。（8・23）皇太子主催晩餐会。仏国軍艦艦長。（8・25）カムラン湾発。（9・2）館山着。（9・3）横浜着。秩父宮雍仁親王及び高松宮宣仁親王らと対面。また奉迎の原首相らに謁謁。

右の旅程からも理解されるように、皇太子は、各国の国王・皇帝・大統領、ローマ法王、諸侯、国務大臣、元帥、市長などの会見、戦跡視察、観劇、市内観光など、実にさまざまな活動を行っている。また、そのすべてを掲げなかったが、外遊時、皇太子並びに相手方主催の午餐会・晩餐会が頻繁に催されたのであるが、皇太子は数多くの人士と会食し、面談を重ねている。こうした姿は、皇太子教育で危惧された点は、乗り越えられたようである。後述するように、昭和天皇は外遊する前の自分を「カゴの鳥」と語っている。この時の皇太子が如何に開放感溢れる日々を送っていたかが理解される。

そして同年九月三日、皇太子は帰国する。原首相は皇太子に伴い横浜から東京へ向かう途中の光景を「沿道横浜東

京開始ント人ナキ所ナシトモ云フヘキ盛況ニテ到處万歳ノ聲ヲ絶タス如何ニモ国民歡喜ノ色ヲ現ハセリ⁽¹⁶⁾と日記に記し、国民の歡迎ぶりを伝えている。この国民の姿は、皇太子に対する期待が大きなものとなりはじめた証左かも知れない。さて、この訪欧について、昭和天皇は記者会見でつぎのように語っている。なお、以下の傍点は、引用者によるもの。

○昭和四五（一九七〇）年九月一六日⁽¹⁷⁾

ええ、印象に残る思い出はいろいろあるが、ヨーロッパに旅行したことです。若い時ヨーロッパに旅行した時が最も印象に強く残っています。もちろん大戦前後の苦勞したことは申すまでもないことです。

私のそれまでの生活がカゴの鳥のような生活でしたが、外国に行つて自由を味わうことができました。そのことが最も印象深いことでした。カゴの鳥のように何も知らない私を外国に連れて行ってくれた随員の世話で、外国でも何一つ困ることなく無事に使命が果たせ、旅行ができました。

今もあの時の経験が役立ち、勉強になつて、今日の私の行動があると思っています。

ここには日本では味わうことのできなかった「自由」を

実感したとの素直な見解が表出されている。驚くことに、皇太子には「自由」がないのである。さぞや、新鮮な体験であつたであろう。

三 日本から英国へ

『香取新報』は、「発刊ノ辞」で「畏クモ東宮殿下御渡欧ニ際シ御召鑑香取ノ乗員トシテ奉仕ノ大任ヲ忝ス。実ニ空前絶後榮譽ニシテ子々孫々ニ伝フ可ク、又其任や極メテ重大ナリト謂フ可シ」と、乗員となつた誇りと任務の重大性を説く。そして、その内容は、「鵬程万里」をはじめ、「艦内情報」「艦外通信」などの定形枠の記事や、適宜企画された記事で構成され、皇太子の動向をはじめ、日本政府・宮内省や世界各国の政治動向、訪問先の歴史・文化・情報、歌壇、さらには漫画「カトリパック」、英会話など、実にさまざまな情報を伝えている。また、投稿も積極に呼びかけている。艦船と言う限られた空間、限られた構成メンバーと共に生活する乗組員達を飽きさせない工夫が随所に施されていて興味⁽¹⁸⁾が尽きない。なお、皇太子もこの『香取新報』を読んでいる。

さて、ここでは往路での皇太子の様子⁽¹⁸⁾がどのようにえがかれ、伝えられているかを述べてみたい。

① 沖繩上陸

三月六日、皇太子は、与那原から輕便鐵道で那覇の県庁、ついで人力車で首里の尚家及び旧王城を訪う。この訪問は、急遽実現されたのであるが、その時の情景を「鵬程万里」はつぎのように記す。⁽²⁰⁾

県民歡喜の裡に明け行く空は拭へるか如き行啓日和。

一刻も早く御英姿仰かばやと、彼処の山此処の磯に打群ふ赤子か顔も晴ればれと、何れも皆な手を翳して青海原に艦影の発見に努める折こそあれ、一抹の煤烟倏忽として地平線上に浮き立つと見る一点に更に一条を増す。

(中略)

今回の如き本島に殿下を迎へ奉るか如きは、空前にして絶後とも云ふべく、五十余万の県民狂喜朴舞を禁じ難かりしも、宜なるかなにて春光熙々一木一草に至るまで依て然として今日の佳き日を祝ふもの、如く、球陽の春為めに新なるの感がある。

(中略)

錦衣帰古郷とは艦長の今日を云ふべきか。実に漢那大佐の声望は夙に本島に高く老幼と雖も漢那大佐の名を知らぬものはない。歌にまで謳つて、其徳望を欣慕しつゝ、ありし由なるか。今や我か帝国無前の盛儀、東宮

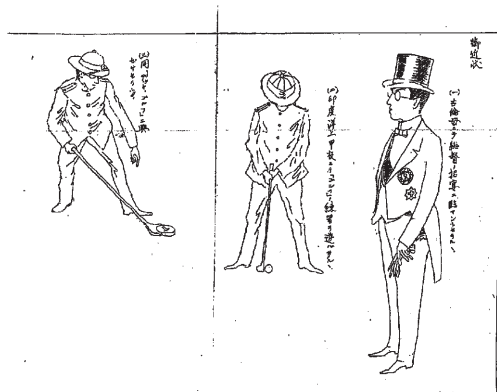
殿下御外遊の御挙あるや、最も光榮ある御召艦の艦長として渡欧の途次、殿下に供奉して郷土の山水に迎へらる、これをし錦衣古郷に帰ると云はずして何んであろふ。

(中略)

聽て尚侯爵家を出でさせ給ひし殿下には首里城跡に成らせらる。此の首里城は里俗鎮西八郎為朝の築きしものと伝ふるも真偽詳ならず。往年までは尚家の居城たりしもの。今は城内に学校がある。校庭に於て此の県人の最も特意とする中学生の唐手を御台覽に供した。

尚家、漢那憲和、沖繩の近代を考える上で、抜きにしてはならない家、人物である。昭和天皇の沖繩訪問と言うと、戦後、天皇がそれを強く望むも実現しなかったことが、沖繩問題を考える際に重要な素材として語られるのであるが、右にみたように天皇は皇太子時代に訪れている。そうした点から戦後の沖繩訪問問題も帝国日本の膨張という史的流れからみる必要があろう。

また、三月九日号附録の「カトリバック」で、皇太子が伝馬船に乗船して上陸する姿を伝える挿絵(A)が掲載されている。この段階ではまだ皇太子の全身の姿はえがかれていないが、三月下旬のコロンボでの総督招宴と甲板上でのゴルフの姿をえがいた挿絵(B)では全身がえがかれている。



挿絵③



挿絵④

② 艦内視察

三月一九日、皇太子は、シンガポールに停泊中の香取の載炭作業、また、四月一二日、罐室を視察するのであるが、『香取新報』はその時の模様をつぎのように記す。

正午の赫陽に瀧と流る、熱汗を絞りつ載炭に着手した。然るに午後一時半頃である。常々下情に御心を配らせ給ふ殿下には赫熱下に載炭の激務に従ふ乗員の労苦を思召され、畏れ多くも射陽赫々加ふに炭粉立羣る載炭の現場に玉歩を運はせ給ひ、親しく各団を御巡視。載炭の実況を御台覧遊された。其御至情の程拝察するだも感激の極にして、斯の如く載炭中を御台覧の栄を得たる如きは帝国海軍創始以来始めての事である。実に此の破格の光栄に浴したる載炭員は御至情に感奮、茲に勇氣百倍し赫熱の何たるやを忘れて努力したる結果、午後の載炭は驚く可き好成績を示し、午後五時二十分頃、早くも全部の載炭を結了した。

機関部の栄光

今朝九時皇太子殿下、閑院宮殿下には供奉員と共に、畏くも作業服を召させ給ひし後、機関室及罐室に成らせられ親しく機関部員当直の実況を御視察遊されたり。

御心の程拝察するだも畏き極みと謂ふべし。⁽²²⁾

既述したように四月二日には鹿島の第四罐室で罐管破裂し機関兵三名が殉職し、その五日後の七日には香取の汽罐第三号罐が破裂し二名が殉職している。当時の航海の危険性——天候・航行のみならず、内燃機関・搭載火気の管理など——を考えると、ここには同じ艦艇に乗り込む者同士の連帯感に通底するものが感じられる。

③誕辰奉祝

四月二九日の皇太子の誕辰に際し、香取では奉祝の会が開かれる。『香取新報』は、その奉祝関係の記事を連日にわたり掲載してお祝いの気持ちを紙面全体に表している。中でも乗組員による奉祝の余興の模様記事からは微笑まじい雰囲気さえ感じさせる。⁽²³⁾

后甲板設けの余興場に臨ませ給はんとする折から勇しい鈴の音が前部の方から近いて来る。随行の諸官が何事かと振り向かれる頃には香取新報社と染め抜いた法被姿の売子が号外くんと声高に呼はりつ、駈けて来る如し。号外だ号外だと羽が生へて飛ぶ様に売れる。殿下に於かせられても微笑を漏らせ給ひつ御手づから売子の号外をとらせ給ひ、供奉員諸官も其の号外を手にして此の飛入り余興に笑ひ崩れながら殿下の御着席を

待つて着席。乗員一同も極めて静に御座席近くに位置した。すると又もや号外売りか勇しく飛び込んで来て、両殿下並に珍田供奉長、侍従長等に差上げた後、場内に配布すると笑声が再び満場に起る。其の号外には殿下御誕辰に祝意を表さん為めの仮装行列が前甲板を發進せりとの報せで、間もなく其の予報通り楽隊を先頭とした仮装行列が足取り面白く練り出して来た。(中略)一番最後に来た田舎の若娘に扮した花笠姿の五六人が殿下の前に輪を作つて三唄をどりを踊り拍手大喝采を得て下ると、仮装行列は殿下に敬礼して一先づ舞台外に下る。之れに入れ代つて次表の様な余興が開始され拍手大喝采鳴り已まず。両殿下に於かせられても殊の外深く御感興を催させ給ひ、各余興を終る毎に拍手を遊ばされるを御見けした。

④英国皇帝との出会い

『香取新報』では英国を強く意識した記事が順次掲載されはじめる。例えば、英国の歴史・国情・世情は言うに及ばず、『英国々歌』が紹介された際、「常に海上の覇権を握つて他国の奴隸と成らないといふ英国人の意気が旺盛⁽²⁴⁾」しているとの「英国々歌の由来に就而」と題する記事が添えられている。

また、軍事同盟である日英同盟についても、つぎのような記事が掲載される。²⁵⁾

英紙ノ日英同盟観

当地「イブニングオブザハース」紙ハ、日英同盟改締ノ時機ニ際シ、日本皇太子殿下の御訪英ハ頗ル興味アル事ナリト冒頭シ、日英同盟成立ヨリ今日ニ至ル迄ノ経過ヲ詳述シタル后、改締サルベキ同盟条約ニハ須ク日本ノ対支政策ヲ明ニスル要アリ。コレ英人中ニハ近來日本ノ対支政策ニ対シテ、疑惑ノ念ヲ抱クモノ多ケレバナリ。尚又此ノ同盟ノ力ニ依リ、米支等他国ニ相対抗セントスル如キハ勿論、而ク誤解サレ易キ攻守同盟ノ条項ヲ含ム現在ノ日英同盟ニハ、現在と云はず將來ニ於テモ英人中反對意見ヲ持スルモノ尠ラザレバ、此際斯ノ如キ疑惑多キ条項ヲ削除セル平和的同盟ナラシメザルベカラズト論シ居レリ。

海外の新聞記事を紹介して、この時点の日英同盟改訂問題の要点を手際よく伝えており、問題意識の高さが窺い知れる。しかし日英同盟は、図らずもこの年の末に四ヶ国条約が締結されたことにより廃棄されることになった。これは、第一次世界大戦後の国際政治の枠組みが変化し、日本は大国として認識されたものではあるが、他方で日本の中国進出が英国の国益と対立する因子となったことを意味して

いた。皇太子の訪英は、新たな日英関係を切り開くことを強く期待されていたのであるが、実は東アジアで日英の国益が激しく対立・衝突する新たな時代に入っていく最初の年になされていた。皇太子の英国を重視する姿勢を知れば知るほど、これは歴史のアイロニーと言わざるを得ない。皇太子は、日英同盟の行く末を見据えていたのであろうか、五月九日、ロンドンに着く。そしてジョージ五世と会うことになる。『香取新報』は、五月一〇日付でつぎのような記事を掲載してそのことに触れる。

奉祝御安着

皇太子殿下に於かせられては波濤万里いと安らけく、御目的地に御入着。昨日、英国皇太子殿下の御出迎ひを受けさせられ、御機嫌殊の外麗しく特別貴賓列車にて御入京。英皇室御訪問の大儀を執り行はせ給ふ。邦家の慶事何ものか之に過ぎん。祖国発航以来、咫尺に奉仕し得る光榮に泣きつゝも、御航途安かれ、重き務めに過失なかれかしと、日夜千々に心を碎きし吾人乗員は、皇天の加護と大稜威の余光とにより恙く大任の一半を果し絶大なる国民の輿望を充し得て欣喜舞踏の情禁じ難きものあり。²⁶⁾

ところで、昭和天皇は、ジョージ五世、英国王室からうけた影響について、戦後、記者会見でつぎのように語って

いる。

○昭和三六年四月二四日⁽²⁷⁾

いろいろあったが、何といつてもいちばん楽しく感銘が深かったのはヨーロッパの旅行です。なかでも英国でバッキンガム宮殿に三日泊まってジョージ五世陛下と親しくお会いし、イギリスの政治について直接知ることができて参考になった。

○昭和五四年八月二九日⁽²⁸⁾

ええ、それは何といつてもイギリスの王室を訪問したことでありまして、そのイギリスの王室はちょうど私の年頃の前後の人が多くつて、実に私の第二の家庭とでもいうべきような状況であつたせいもあつて、イギリスのキング・ジョージ五世が、ご親切に私に話をした。

その題目は、いわゆるイギリスの立憲政治の在り方というものについてであつた。その伺つたことが、その時以来、ずっと私の頭にあり、常に立憲君主制の君主はどうなくちゃならないかを始終考えていたのであります。で、その具体的な話というのはですね、イギリスの王室の習慣として、話すことはできないから、ここでは話さずにおきます。

(中略)

ええ、それは。そして、始終、その立憲君主であることが、私のもう終生の考えの根本であります。

○昭和五六年四月一七日⁽²⁹⁾

皇太子時代、英国の立憲政治を見て、以来、立憲政治を強く守らなければと感じました。しかし、それにこだわらず、たまために戦争を防止することができませんでした。私が自分で決断したのは二回⁽³⁰⁾でした。

それぞれ含蓄のある発言ではあるが、特に傍点の部分が伝えるものは、この時の経験が統治権の総攬者としての政治姿勢を決定的なものにした、君臨すれど統治せずと言う「理想とする立憲君主像」に自らを近づけていく、或いは重ね合わせていく上で如何に重要な体験であつた、外遊立憲君主として自立する上での原点であつた、という論理を展開している。どれだけ天皇に強いインパクトを与えた経験であつたかが理解される。

しかし、ここでひとつ考えておきたいことがある。それは、つぎのような点である。さきの天皇の発言は、天皇の政治姿勢の基本として多くの識者が引用するのであるが、政治の実態との比較の上で、あまり整合性のとれていない形で引用されているように思えてならない。

一九三〇年代から四〇年代の天皇と政治の関係は、そう

した理想的、理念的なもので対処できるものではなく、場合によっては天皇の意志さえもが通らない非常に緊張度の高い関係であったことはよく知られている。そうした意味から、天皇が政治に正対し、どれだけ苦悩し、どれだけ重い政治決断をしたのかという事実を踏まえて、戦後の天皇の発言の意図を深く考察しなければならない。そのことは、戦後、昭和戦前期の政治について天皇にヒヤリングした際の記録とされる『昭和天皇独白録 寺崎英成・御用掛日記』（文藝春秋、一九九一年）の内容からよく理解されると思う。

天皇は、常に政治と向き合っていた。よって何故、天皇は、外遊Ⅱ立憲君主として自立する上での原点としての訪英という論理をことあるごとに展開するのか、その意味をそれぞれの発言の時期、政治的環境を踏まえて分析しないといけないものと考えているのである。また、もう一つ合点のいかないことは、ジョージ五世が皇太子をどのようにみていたのか、という点が全然検討されていないことである。歴史学の当然の方法として関係者の史料調査なくして研究は始まらない。今後、ジョージ五世の関係史料調査を行い、彼が皇太子をどのようにみていたのかを明らかにすべき必要がある⁽³²⁾。

四 仏国訪問以降

ここでは仏国訪問以降、各国での様子を紹介してみたい。『香取新報』は、英国同様、大陸各国の歴史・国情・世情について乗組員へ情報提供を行う。しかし、皇太子の情報については、皇太子が内陸部を移動している時は記事情報が簡潔なものとならざるを得ないようである。

①戦跡視察

皇太子は第一次世界大戦の戦跡を巡視し、その惨状から戦争の無意味さを強く心に刻んだ、といわれているので、その模様を確認したい。しかし、その情報は非常に少ない。例えば、①ベルギー・オスタン（六月三日）——「午前八時汽車にてオスタンに行啓。自働車にてニューポール、デクスミウト及キピル戦場御見学。接伴員ビウビック陸軍中将並ボンチュス陸軍少将より彼我陣地破壊せられたる人家森林等に付、当時の戦況を御説明申し上げたり⁽³³⁾」、②フランス・ベルダン（六月二五日）——「午前七時四十分メッツ御発令。九時ベルダン御着。ボー堡塁銃劔塹壕及ベルダン、シタデル等御見学の上、車中にて御昼餐を召させ給ふ。午後三〇四高地モーフオーコン戦場⁽³⁴⁾」、③フランス・ソナム（六月二九日）——「午前八時、巴里北停車場御発車。特

別列車にてアルベール御着。全地より自働車にてラハボアセウ其他の戦跡御見学。アルベール停車場に於て御午餐の後、更に自働車にてマリクール其他の戦跡御見学。午後七時、モンデチエ御発車。全九時還啓あらせられる⁽³⁵⁾」と言った具合である。

②艦内角力

引き続き乗組員との交流は、活発であつたようである。七月二九日、「紅蓮の熱氣」が吹き付ける紅海において、香取の後甲板で皇太子は供奉員及び海軍大尉侯爵小松輝久を相手に角力に興じる。その時の模様を海軍少佐雪下勝美は、つぎのように記す。

皇太子殿下の御角力を拝観して所感を記す

海軍少佐雪下勝美謹記

横浜御発艦以来、草莽の微を以て畏くも尊影に咫尺し奉る光榮に浴するの機を得てより、茲に五閱月。今更ながら殿下の万事に御趣味深く、御智識亦該博に渡らせられ、時々近侍の人々を驚かし給ふばかりでなく、あらゆる「スポーツ」にも亦御造詣深く、日々御運動に御心身の鍛練を努めさせ給ふのを拝し、欣仰措く能はざるは申す迄もない所であるが、一昨日后甲板に於て供奉員及小松侯爵を御相手に角力に興ぜさせ給ふを

拝観し、感奮禁し能はざるものあり。茲に秃筆を呵して所感を謹記し、一は以て自ら警め、一は之を未知の読者に謹報し恐れ多き事ながら仰いて以て活教訓とされんことを望むのである。

(中略) 炎熱の下、しかも日盛りの午後二時頃、我皇太子殿下には苦熱を物ともし給はず、后甲板に於て粗末な「マット」製仮土俵上に約く三十分間雄々しくも角力を遊ばされ淋漓たる玉汗を拭はせもあへず、更に海水浴ヲ試みさせ給ふ。御壮氣正に懦夫をして起たしめ給ふものあり。

幼少の頃より角力がすきであつたとされる皇太子であるが、これも後述の④荒天中の運動で触れるように皇太子と健康問題を多分に意識したものであらう。

③殉職慰霊

八月三日、荒天の中を航行する鹿島で移動物の固縛作業中の二等水兵が艦に押し寄せた大きな波にさらわれて遭難・殉職する事故が発生した。

香花料及祭祀料御下賜

鹿島に溺者あるを聞召さるや

皇太子殿下には后艦橋に上らせ給ひ、溺者に対し深く御配慮あらせらるゝもの、如く、何かれと供奉員に御

下問遊さるゝを拝したが、夕刻遂に溺死の趣を聞召され御残念に思召されて、畏くも香花料二十円を、又特別の思召を以て遺族に祭祀料金五百円御下賜の旨御沙汰あらせらる。⁽³⁷⁾

遭難した水兵を探すべく荒れた海上に目をこらす皇太子の姿を彷彿とさせる記事である。

④ 荒天中の運動

八月四日に書かれたものと思われるが、荒天中にも拘わらず皇太子がデッキビリヤードを行ったことをうけて、皇太子が航海に強く壮健であるかを強調する記事が掲載された。⁽³⁸⁾

荒天中の御運動（八月四日謹記）

予想通り猛烈な南西信風に煽り立てられた巨浪が鞭々として上甲板に打上げて来ると云ふ物凄い荒天に拘らず昨日、皇太子殿下には後甲板に於て奈良（武次）武官長、浜田（豊城）武官、西園寺（八郎）氏をお相手にいと御元気にデッキビリヤードを戦はせ給へり。斯の如き荒天にデッキビリヤードの遊戯か甲板で行はれたことは殆ど嚆矢と云つてよからし。之れをみても如何に殿下が航海に強くあらせらるかを拝察することが出来る。漏れ承る処に依ると、殿下には一昨日以来一

度も御食事をお止めたことになつたことがなく、御平常と少しもお変りがないとのことである。畏くも竹の園生の御身以て初の御航海に、然も斯の如き荒天中に拘らす多年航海に従事した乗員以上に強くあらせらるゝことは、如何に御身心の鞏固御壮健であらせらるかを確証し奉るものであつて、国家の為め寔に慶賀に堪へない次第である。

この記事から大正天皇の健康問題が透けてみえてならない。やはりと言うべきか、皇太子は、健康であることとさ政治的であつたのである。

おわりに

以上、『香取新報』に外遊時の皇太子がどのように語られ、且つえがかれていたかを検討してきた。抑も本稿の根底には、近代天皇制の下に歴史を歩んだ日本において、国民自身が天皇制や天皇をどのように認識したのか、と言う問題意識がある。どのような国家体制もそれを支える国民がいないと成り立たない。そうであるならば国民の国家認識を確かめる必要があろう。そうした問題意識から『香取新報』の記事をひとつの素材として取り上げたのであるが、その中から意外にも乗組員達の皇太子への「親しみ」とも言える心情が伝わってきた。そのことを端的に書き記すも

のを紹介したい。⁽³⁹⁾

御舩朝を祝し奉る

膳古の御盛儀。東宮殿下海外御巡遊本日をも以て目出度御終了。御機嫌弥々麗しく万民の歡呼奉迎裡に横浜御着。約半歳の御宮居たる香取を御退艦。帝都に御還啓あらせらる。

顧れば、皇太子殿下には春尚若き雛月三日熱誠なる万民の歡呼奉送裡に無前の御壯途に就かせられてより鵬翼万里の浪路もいと安らけく駕の向ふ処、歡呼の涌さるなく錦旗の翻る時、万象風靡の色を示さざるなく、共同日を閲し給ふ百八十有五日程を重ねさせ給ふ。二万四千余海里終始御機嫌麗しく御微恙だもあらせられず。茲に御舩朝の御盛儀を迎へさせ給ひしことは、実に国家の一大慶事にして七千万国民の狂喜舞躍を禁じ能はざりしも宜なりと謂ふべし。

吾人乗員草莽の身を以て供奉の大命を辱ふし、此の無比の御盛観に会したるのが、日夜咫尺に奉仕して、殿下御高德の数々を拝し得たるは、実に吾人の生涯を通じて光榮の最たるものにして、過去六ヶ月艦路の跡を顧れば夢の如く感激の涙滂沱として双頬に流るゝを覺ゆ。

噫大御子帰りましぬ。七千万国民、今宵の夢や如何に

て任務終りぬ。吾人の結ぶ今宵の夢こそ如何に光榮と希望に耀くことであらう。

茲に渾身の至誠を傾けて御舩朝を祝し奉ると共に、謹んで御宝寿の無窮を祈り奉る。

この記事から、生き生きとした姿を見せて活動する皇太子と共に、大きな使命を果たした乗組員達の達成感が伝わってくる。帰国後、彼ら乗組員達がふたたび大日本帝国の巨大なヒエラルキーの中に置かれた時、「親しみ」さえ感じた皇太子がもはや手のとどくところにはいないことを実感したことであらう。またその後、皇太子が天皇となり、昭和三年に即位の礼をあげた時、そこには大正一〇年の皇太子は陰も形もない存在となっていたことに気づかされたであらう。その時、彼ら乗組員達は、どのような感慨を抱いたのか、或いは「大正は遠くなりけり」と、過去の一齣として心の奥に閉まったのであらうか。

その後、大日本帝国は大きな軋みを立てて昭和の歴史を歩むのであるが、恐ろしいほどの「神聖なる天皇」像が創り出される中、昭和天皇は帝国日本を守るべく政治と格闘する激しい日々を送ることになる。

注

(1) 筆者は、第一次世界大戦後の皇室の危機として、大正天

皇の健康問題、皇太子の教育問題、外遊問題、摂政問題の四つを措定している。よって外遊問題は、それらの要素の相互関連の中で考察しないといけない問題と考える。そうした意味から『外務省の百年』上巻（外務省百年史編纂委員会、一九六九年）をはじめ、鈴木正幸「近代天皇制の支配秩序」（校倉書房、一九八六年）、波多野勝「裕仁皇太子ヨーロッパ外遊記」（草思社、一九九八年）、同『政党政治と天皇』（日本の歴史22。講談社、二〇〇二年）、永井和「青年君主昭和天皇と元老西園寺」（京都大学学術出版会、二〇〇三年）、伊藤之雄「原敬内閣と立憲君主制―近代君主制の日英比較―」（一）（四）『法学論叢』第一四三巻第四六号、同第一四四巻第一号、横山孝博「皇太子裕仁の訪欧と大正デモクラシー期の天皇・皇室像」（『北大史学』第三号）、伊藤学「大正一〇年皇太子外遊決定の経緯―若手宮内官の動向に関する考察―」（『法政史論』第二九号）、梶田明宏「大正十年皇太子御外遊における訪問国決定の経緯について」（『書陵部紀要』第五七号）等が多くの示唆に富む見解を示している。なお、前掲「裕仁皇太子ヨーロッパ外遊記」の「主要参考文献」は、皇太子の外遊を研究するための史（資）料を数多く紹介している。

防衛省防衛研究所所蔵『香取新報』は、大正一二年三月三日付で創刊号が発行され、帰国した九月四日付で最終号である第一八六号が発行されている（但し、同日、同号で複数回発行されている日もある）。なお、海軍艦船内において今で言うミニコミ紙が発行されていたことは知られているが、海軍全体での姿は不明な点が多い。

(3)

そうした意味からも『香取新報』が持つ史料の価値は高い。また、供奉艦鹿島でも同じくミニコミ紙が発行されていたが、その全体を確認できないでいる。本稿では皇太子の動向に焦点をあてたが、海外渡航が一般的でなかったこの時期に、乗組員達の経験がどのようなものであったかを知ることが、日本人の世界観・対外観を考察する上で貴重な素材と考えている。そのことについては別稿に譲りたい。

(4)

拙稿「皇太子裕仁親王の教育問題と金子堅太郎―金子堅太郎の「内申書」を手がかりに―」（『大倉山論集』第五〇輯）所収。

(5)

杉浦重剛「致誠日記」（明治教育史研究会編『杉浦重剛全集』第六巻〈杉浦重剛全集刊行会、一九七三年〉所収）、杉浦重剛「倫理御進講草案」（杉浦重剛先生倫理御進講草案刊行会、一九三六年）等を参照。

(6)

岩壁義光・広瀬順皓編集『影印 原敬日記』第一二巻、一三九―一四一頁、及び一四二―一五一頁。

(7)

前掲「致誠日記」大正六年一月二日条、三一―一頁。なお、本稿では史料引用に際し、読み易さ等を考慮して適宜句読点を付したことをお断りしておく。

(8)

「少壮者達の進言」とは式部官松平慶民、宮内書記官兼宮内省参事官二荒芳徳、式部官・式部職庶務課長西園寺八郎等を指すと言われ、彼らは宮内省改革を構想しその中で外遊を考えていたと言う（前掲「大正一〇年皇太子外遊決定の経緯―若手宮内官の動向に関する考察―」）。

(9)

前掲『影印 原敬日記』第一五巻、四四―五二頁。

(10)

波多野澄雄編集／奈良武次著「侍従武官長奈良武次日

記・回顧録』第一卷（柏書房、二〇〇〇年）、大正九年八月一四日条。奈良は、この山県の見解をベースに、山県以外の人物の考えをも加味して「御補導方針」に関する要項を案定したと言う（ほぼ山県の見解と同じであるが、兵器の練用に関心を持たれ射撃も実行を試みるようにするとの一項目が増えている〔前掲「侍従武官長奈良武次日記・回顧録」第四卷中「東宮武官長時代」一一八頁〕。なお、略々同じ時期のことと推定されるが、山県は奈良に対し皇太子に拝謁した際、「御返詞なく又何にも御下問なく恰も石地藏の如き御態度」であったことを遺憾に感じ、その原因を浜尾の「箱入り教育」と批評する程であった（前掲「侍従武官長奈良武次日記・回顧録」第四卷中「東宮武官長時代」一一六頁）。

(11) 藤村通監修／松方峰雄他編集『松方正義関係文書』第五卷（大東文化大学東洋研究所、一九八三年）、二七〇頁。国立国会図書館憲政資料室所蔵「牧野伸顕関係文書」書類の部・4-1「松方内大臣の葉山御用邸での上奏」。なお、前掲「松平慶民関係文書（写）」にある上奏写に「二荒ノ草案ニ基キ平田（東助―引用者）子ノ手ヲ入レシモノ」との書き込みがある。

(13) 前掲「侍従武官長奈良武次日記・回顧録」第一卷、大正一〇年二月二〇日条。なお、前掲「松方正義関係文書」第五卷、二七六頁も参照。

(14) 旅程については、宮内大臣官房庶務課「皇太子殿下海外御巡遊日誌」（一九二三年）、外務省外交史料館所蔵「皇太子裕仁親王殿下御渡欧一件」などを参照した。なお、宮内省では皇太子外遊の正式記録を作成し、内容によつ

ては天皇からもヒヤリングを行っていたことが『木戸幸一日記』などから明らかである。

(15) 五月九日のバッキンガム宮殿での公式晩餐会での皇太子のスピーチなどは、音声朗々としていたと、同席した何人もの日本側関係者の史料に記されている。こうした面で、皇太子教育で批難されたところの一部が改められている、とみられなくもない。但し、我々は、昭和天皇の基本的資質については正確な情報を得ていないのが現実なので、教育による成果なのかどうかはよく検討しないといけない。

(16) 前掲『影印 原敬日記』第一七卷、八八―九四頁。

(17) 高橋紘「陛下、お尋ね申し上げます」（文藝春秋社、一九八八年）、一四三頁―一四四頁。

(18) 『香取新報』三月二九日付。

(19) 皇太子の沖縄訪問については、前掲『皇太子殿下海外御巡遊日誌』のほか、惠隆之介『昭和天皇の艦長 沖縄出身提督漢那憲和の生涯』（産経新聞出版、二〇〇九年）などを参照。

(20) 『香取新報』三月八日付夕刊。

(21) 『香取新報』三月二一日付。

(22) 『香取新報』四月二二日付。

(23) 『香取新報』五月六日付。

(24) 『香取新報』三月二〇日付附録。

(25) 『香取新報』三月三一日付。

(26) 『香取新報』五月一〇日付。

(27) 前掲『陛下、お尋ね申し上げます』、一一五頁―一二六頁。同右、二七九頁、二八〇頁。

同右、三二三頁。

(29)

天皇は、田中義一内閣総辞職の時の経緯から政治過程に積極的に踏み込むことには慎重となり、それ以後では二・二六事件と太平洋戦争終結の時に自らの意志を通したとの話を繰り返している。但し、この発言が持つ政治性に注意すべきことは論を俟たない。

(31)

これらの発言は、天皇と政治の関係を語る時、よく触れられるものではあるが、筆者は発言の時期や政治状況などもよく押さえた上で、それぞれの発言内容を理解しないといけないと考えている。戦後と言えども、昭和天皇の発言は一般に言われている以上に、政治的意味合いが埋め込められているとみている。また戦後、天皇自身が所謂昭和戦前期の歴史をどのような「歴史」として認識しようとしたのか、或いは認識したのかという点についてはほとんど研究がなされていない。こうした天皇発言の論理と構造については別の機会に検討したい。

(32)

なお、君塚直隆氏は、著書『ジョージ五世』（日本経済新聞出版社、二〇一一年）の「補論 ジョージ五世と日本」で「彼は、まだ二〇歳で大変な好青年なのだが自国の言語しか話さない」とのジョージ五世の日記を引用している。今後は、こうした一次史料を用いた研究を行わないといけない時期にきていると思われる。

(33)

『香取新報』七月二〇日付。

(34)

『香取新報』七月二三日付。

(35)

同右。

(36)

『香取新報』七月三十一日付。

(37)

『香取新報』八月四日付。

(38)

『香取新報』八月五日付。

(39)

『香取新報』九月三日付。

(大正大学文学部教授)